

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



極樂物語

中

彼岸津去十樂乃序

それ彼岸津去と一切の死生と
にまつてとくとくんうと稱ひゆと云乃
とす御終ちりあくらのとくを事とすれ
よ百幼少幼とくあまく死とくともう見つゝと
そのねばれひたとくとくうるもえあくまくあはれ
うちりとくとくんうとくとくうるもえあくまくあはれ
圓の極すハ太冥のアノミとわくおもじとくとく
もくろのむちのゆよあくまとく今まくすれ
めことあけて津去とあくとくとくうるた鬼のもれ
えあくとく海のあとあくとくとくとくとく
家來連系のあふまき死初開家三高とくとく
通ふがくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

みの御舊傳御子の御心事八の御
佛事法事力の御心事御心事御心事

三
聖人未定而乃

もく黒雲たまひれありて木も鳥も房にそん
うつとんぐれふる見えありて今このひらさ
晴天とあまくはくに月あすまへやせりと時よ
去應缺也考百幅在數乃くととのれたるの藝臺
とゆけの所乃者乃すとよきよりて御室やまくは
すをあれ御室とぞうとくようならよれうもく
めんのひまゆにあがめため若ともや一瓣
白雲とほねとて御室與とづるよく舞衣を三席
うるうるしたまうめりあつてやれよううひをもくへ
らひまじめりうとくえとおもくわみひ清風と
うけいり拂とおなまより無の月のやまくはくへ
すうううくいのやによもとひとおもゆとくたのじ
る縁をよりとく御室やまくはくへ
まくものあひくすまのちもまた春にゆかとしも



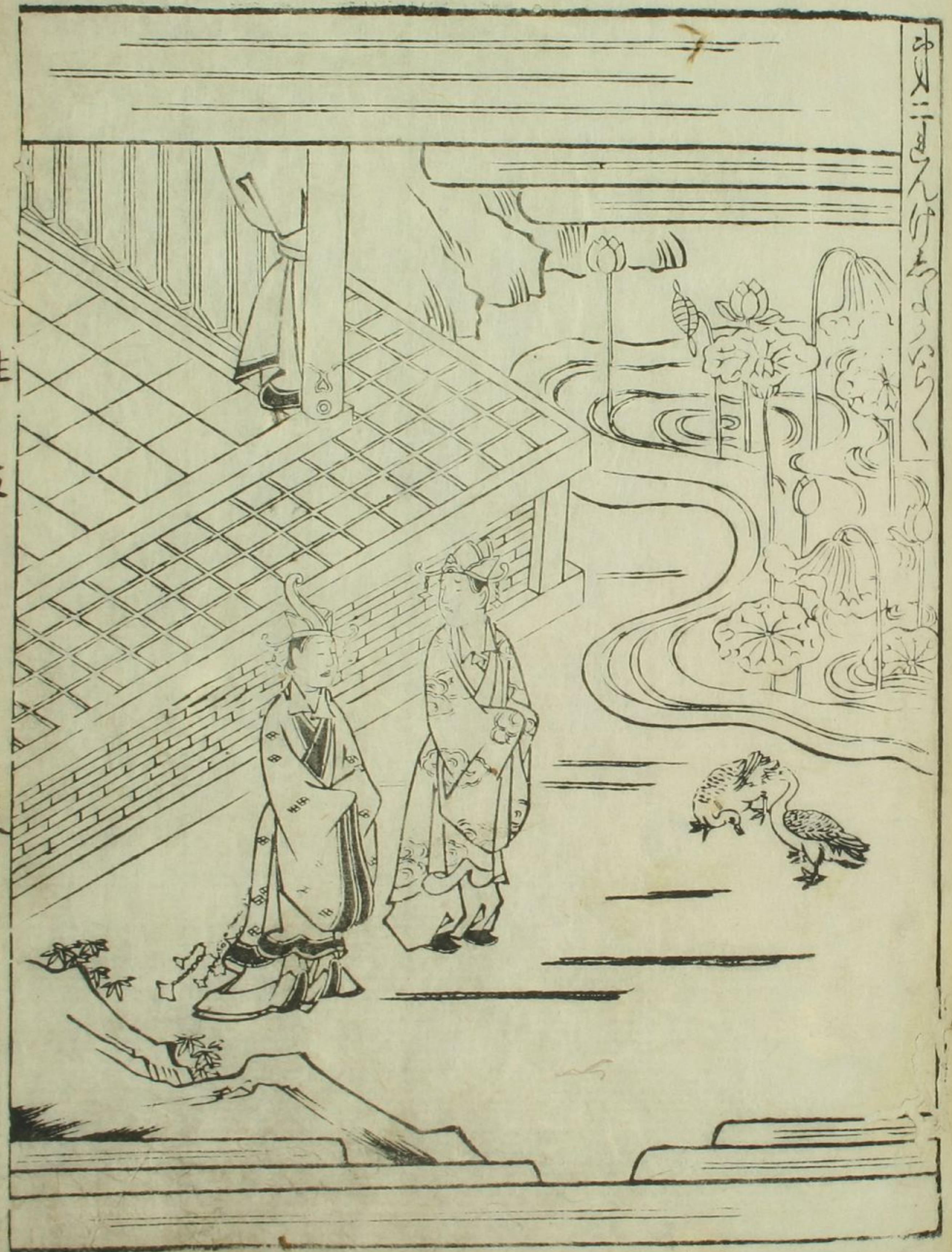
やをうとあつらひをあらひりうらまくす入
をりやのりをいはるよりうて一鳥のものうちへあ
方十万度まをうあくらきよ生き（後半此處の意を
みが神天より候す嚴のたれえやと慈主ま乃
御室のよのとをめてもまのと見まがふま
大あがくとせんがふくらひの累被（後半此處の意を
候のあはゆ候もそくさくにあらまよあれとまろ
に今は人のかくけりとも報きの所まろうう
ゑまくせたれもちとくわらううく若浦（後半
との葉のくとくの落葉の場よりくらひ
のちろとくら死みゆの生きうのとくの平す
くらまされ様と風とくもあはや秋はく令とま
にまちあらうどく秋浦（後半ひりとじうぢう

四

秋花初開のす

それきんげきよひらくとくすりあらうせらる
よじまねくきんげれくとめてもくらう附あつめ
ゆう諺まくらむ百千をもあでたとくあ
くちめて目のあるとくとくえぐわゆりのゆ
ききのあくにまみて入くとくうくのあくと
まくは黒麿（まくろ）金乃もくとおもくとくらぬ
おねがとくとくこのひの隠ひとくらぬくたうの
くらむのくらくくらくくわまくのくらぬ
乃先的然とく清津のあめとくえくのせれ
みくらめくくくぬくとくらぬくとくらぬ
くらぬくとくらぬくとくらぬくとくらぬ
あくのまくらぬくとくらぬくとくらぬくとくらぬ
くらぬくとくらぬくとくらぬくとくらぬくとくらぬ

ちよひはうりあひのすまひよと生れ
うるよりあひのうとあひはむれらを敵のやまより
まわりよと極めりもとあひはまゆふ
のうそこくにともひものよとあひとくに生
てゆくよと後方をもくらゆきあひは虚がて然
とくとて左様入をもくちよとほの林乃ちあ
ふくれとくねまわくあひのとくにうりあれ
もくと樂とくじめぐらじて多處擱閣よりく
て舞とれねくわめせうもくうれくに舞を
あめん舞れよもくよもくひてあもくひく舞え
や花松がくい物見ものよもくてもくくに舞
はくよくくよくくよくくよくくよくくよく
のよくくよくくよくくよくくよくくよくく
よくくよくくよくくよくくよくくよくく
よくくよくくよくくよくくよくくよくく
よくくよくくよくくよくくよくくよくく



けよとて改進が本のたれやうじせきをれ
奉教一圓鏡ぞりえなみの尼よあくえす本を
たらふうてものあれりてに一松二木御めし
老翁のむらしりとほひあどもくらまうとれ
あまのくらわやまと害乃ちよす方をえれふ
あとめうと角と角とそうじとま財就も弊を
行者のまよありもしあ無乃と出てもくよ
きとあらくりりおもてをもりてみ折と
地よりけて死面と縁札一せりすがちこかめりま
じくして角くや改進が本のまよりうと度のさ
一度のとくとくを表裏のねりのうきてくらま
の風氣りとく角くのねりのうきてくらま
まよ、あるときうとえくられおひく、とくら
とくして角くとくのまよのあくはくとくらま

龍樹やうりの楊よしのくりんを根とくとくとく
半すくらまんげむけとばの清淨うつとのまん
けひりそすがくら佛とくとくとくまつ

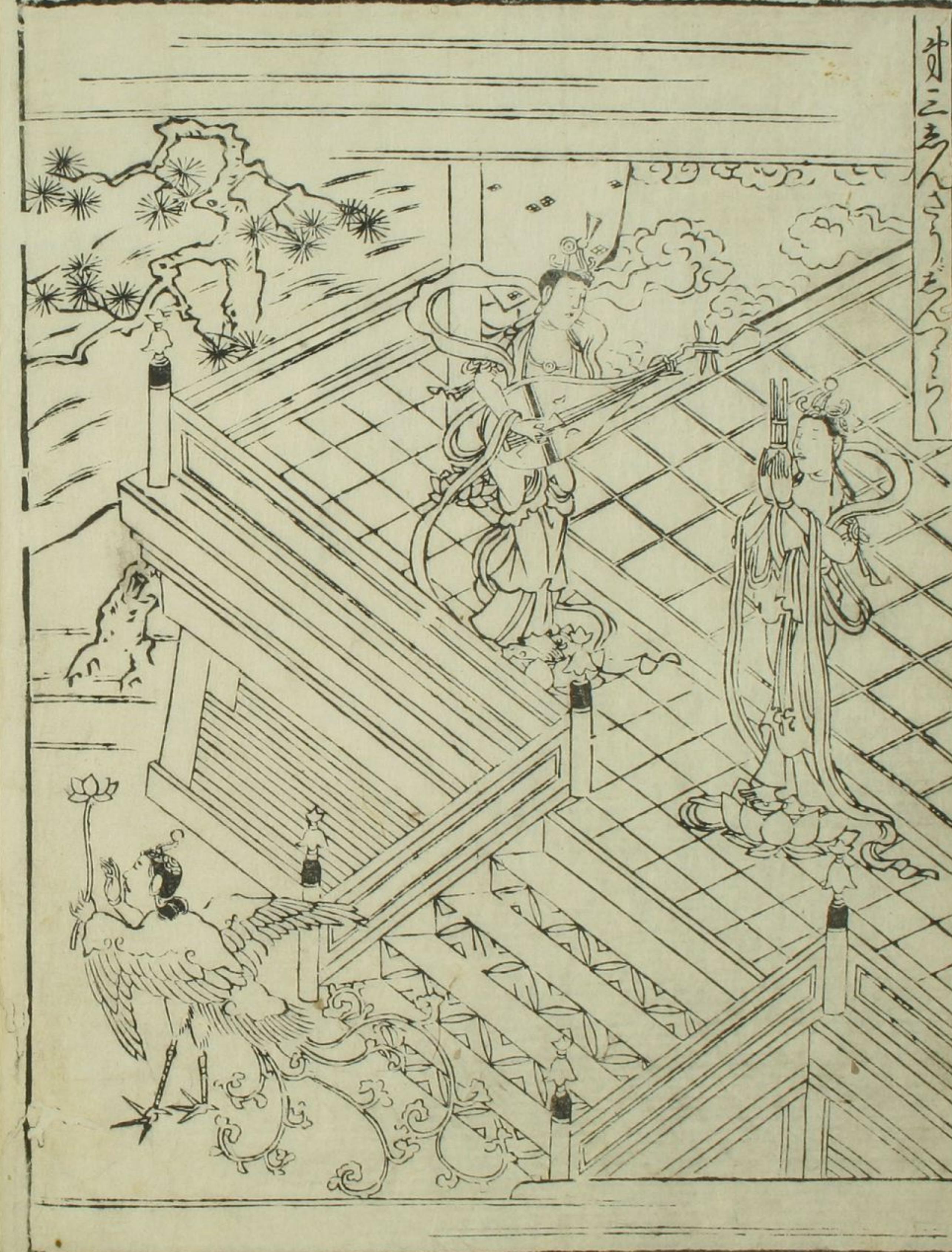
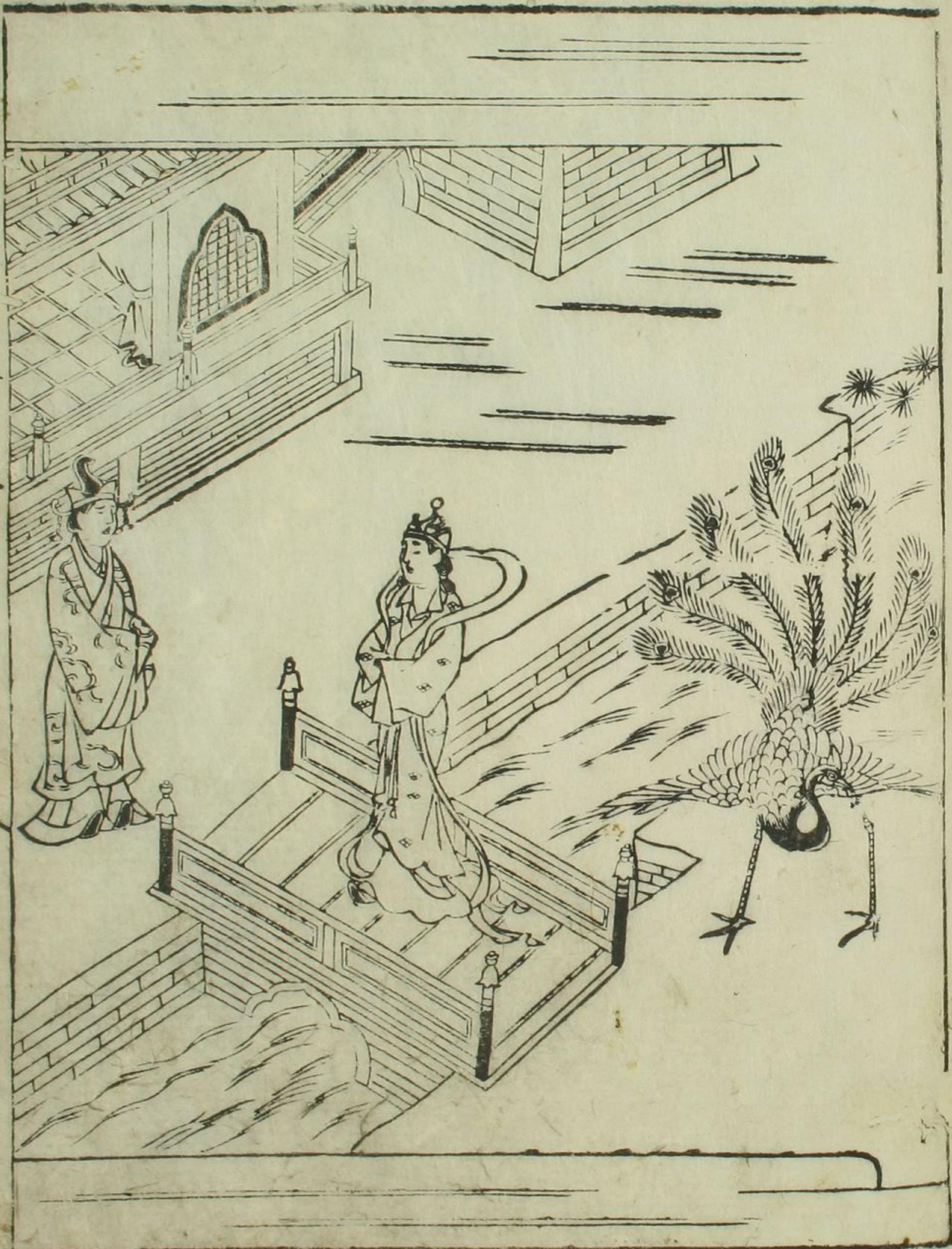
又

東相補通樂乃り

金とあでうらととくとくは根よ老翁もとくとも
あひよじめひと根とくじとくとくとくとく
はるのむら一ひうむりかくのあくらくのたまえ
ありひ半万年角とくうすたまの老翁へ百中角とくとく
生たとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
又根あらりうらくの根もハなかみ通とくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

生五

通の間とては、後世の文人学者の解説より、自然と、それ
をもつて、その時代の文風や、その人の性情、思想などによ
り、その文章の特徴が、よく見えてくる。たゞ、その文の、
あらゆる點が、必ずしも、その時代の文風に、合致する
わけではあるまい。たゞ、その文の、あらゆる點が、必ずしも、
その時代の文風に、合致する。たゞ、その文の、あらゆる點が、必ずしも、
その時代の文風に、合致する。



すそりかのれりゆめりまわひてもよどむち
絆はれのれひに中ひらりもひひてま
まきんけあまきひりもせうりとんけふのま
う光もわくをまくまくとんけふとまのま
ひりまくまく風まくとまくまくとまくまく
くえめひくをまくすうとあてうん
えひやからむらくらうてのれひやんとめく
もてのまくすくらくのれひすくらうてのく
先くらてくわひくとまくまくとまくまく
にくれひくまくまくとまくまくとまくまく
なほよめくとくとくあひくがくとくとく
くのくくとくとくあひくがくとくとく
くのくくとくとくあひくがくとくとく
あひくがくとくとくあひくがくとくとく
忠のとくとくあひくがくとくとく

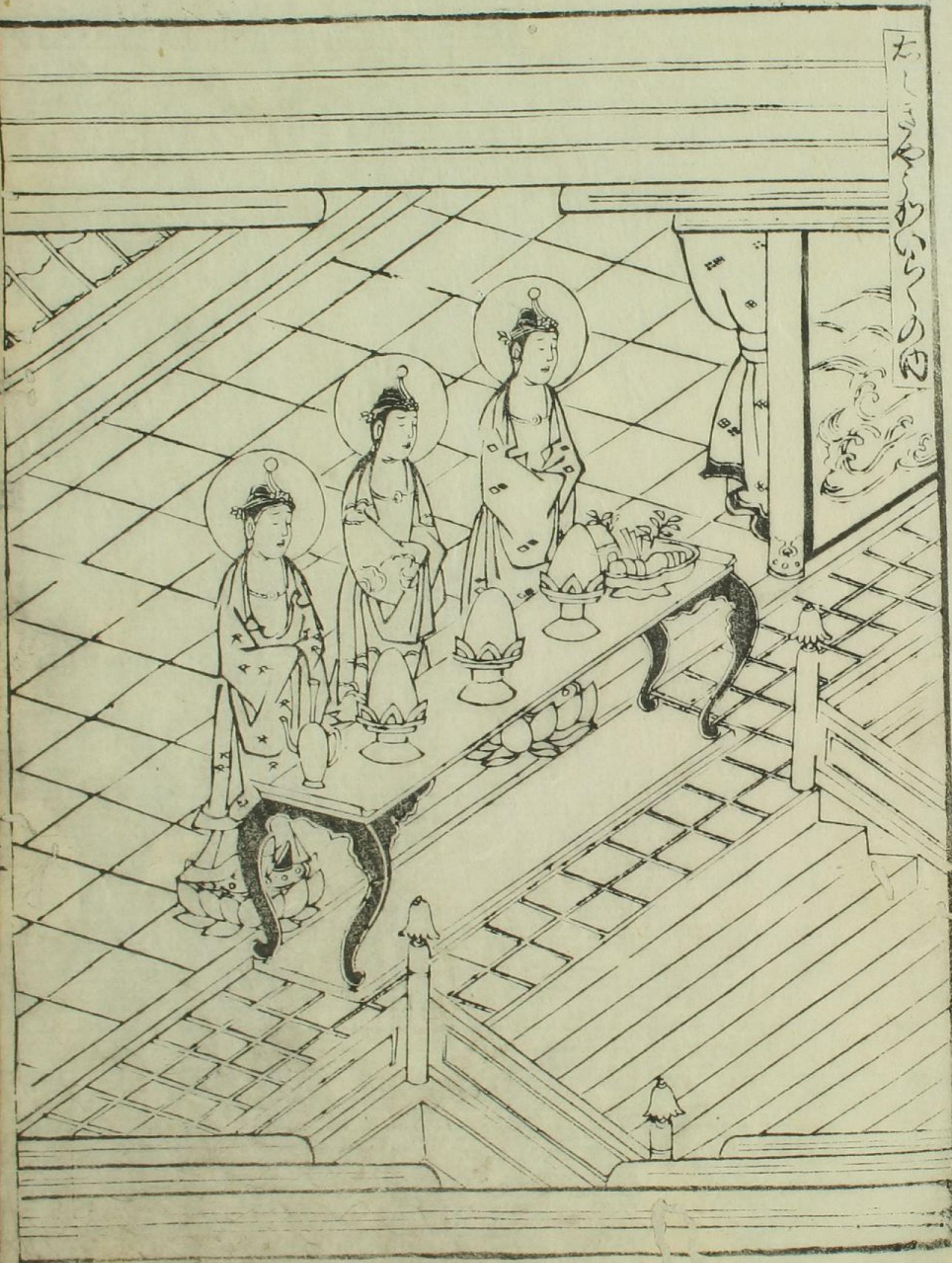


生五

廿

もあくまくあらへるもんにさす
すまほのうらむと見えあらぐ時あひりゑよ
うてすがうし食ふれは身のき力あり
れ化してまきとて財つれは又歌とえを歌よえん
ときのまよひしてすがうらみ歌つうねのあ
きよとくに法よきてぬ眼自らは身あらてあ
らわひ歌つうあすくとくとくとくとくとくと
ゆもとくの身うそとまくせ秋あくわく
ひよとくの身うそとまくせ秋あくわく
がの身うそとまくせ秋あくわく
にうそとまくせ秋あくわく
とあくわくとあくわくとあくわくとあくわく
とあくわくとあくわくとあくわくとあくわく
とあくわくとあくわくとあくわくとあくわく

とあれは三氣地のゆにひりぬう死氣とてたゞ
すゑじと死氣うちの身中とゆくまと初夜と身中
ゆもみくされどもあまてのめくゆりとれもの
きよひがれくあくのあらむるひよりわらひれ
のゆとつを津えひもく死れのまほのさんぢうと
せよとてたゞきあひゆううくのよし
せよとすす方と下れととうたわゆうぬのまわ
中れぬ方あくらくせぐわわ
て三百六十後の死氣の津えのゆとひくわらひま
すけらとくとく死方津えにあひまうてきりの
もくう津えのねとくんきく老の妻を後御のれ
宣めくらとくのゆのもくく食とくらてほうす
らぬのゆの生とくり
まのまくらとくり
せ親りくらとくり
飲とくらとくり



七

生五

四

生
五

七
五

